

# タイにおけるパインアップル産業の現況

中央果実基金・海外果樹農業情報No.68

## 1 概要

タイ国は、パインアップルの生産において世界1を誇り、また、缶詰の輸出量においても世界1である。パインアップルは農産物の輸出において、重要な地位にある。すなわち、パインアップル加工品は、果実及びその加工品の輸出額のうち40%以上を占める。

生産量	2,372,791t
加工用消費(推定)	1,500千t
製品化後の数量	缶詰 475,397t
	果汁 89,827t
国内生食用消費(推定)	400~500千t
損耗(飼料等含む)	373~473千t

(ほぼ100%輸出)

### 2000年輸出額(百万バーツ)

農産品全体	619,927
果物及び加工品	26,451
	(上記の4.3%)
うち生鮮果実(冷凍含む)	6,215.5
果実加工品	17,114.8
うちパインアップル	11,285.1
缶詰	7,876.8
果汁	2,891.1
その他加工品	517.2

1999年における需給バランスは次の通りと推定されている。毎年、生産量の60~70%が加工用に消費される。

## 2 生産の概況

収穫面積に周期的な変動はあるが、長期的には低迷しており増加は見られない。これは、価格が値上がりすれば作付け面積が増え、逆の場合には減少するという自然調整が行なわれているからである。単収が向上していないので、生産量も停滞しており、年間200万t前後である。

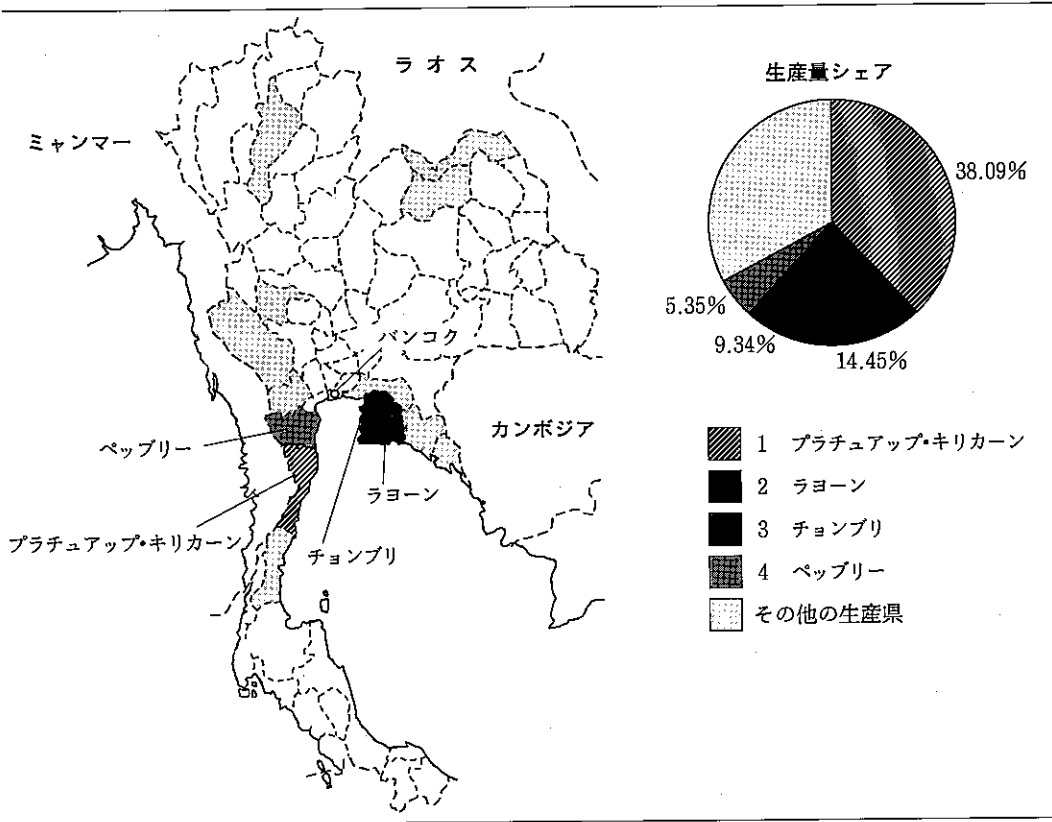
政府による2006年の生産目標は控えめで、生産量2,250t、単収28.1tである。すなわち、単収をかなり上げる(28t/ha以上)ことで現状レベルの生産量を維持するというものである。

パインアップルの生産は20県程度で見られるが、バンコクを中心にして西側数県と東側数県

### 生産の推移

	1991	1993	1995	1997	1999	2000
収穫面積 (ha)	79,693	99,918	90,493	84,698	97,101	97,318
生産量 (千t)	1,931	2,589	2,088	2,083	2,372	2,287
単収 (t/ha)	24.2	25.9	23.1	24.6	24.4	23.5

パインアップル生産量上位4県 ほか



(出典：タイ農業経済局1999年生産年鑑)

に集中しており、中でも14県での生産量が多い。作付面積の増減は、どの県も同じ傾向である。プラチュアアップ・キリカーン県の作付け面積は国全体の45%を占める最大の生産県であるが、他県に較べて生産性は低い。生産農家は、全体で1万5千戸程度と推定されており、平均10ライ (1.6ha) の経営規模である。

### 3 国内価格

価格は需給によって大きく変動を示している。1997年末からの気候不順が1998年の生産量を著しく減じたため、同年の価格は異常な値上がりであった。しかし、生食用に較べると加工用価格の変動幅は小さい。また一般に、同じ庭先価

年平均価格の推移

(単位：バーツ/kg)

	1991	1993	1995	1997	1998	1999	2000
生食用・庭先価格	2.51	1.17	2.38	4.47	7.06	3.59	2.80
加工用・庭先価格	2.59	1.18	2.01	3.33	5.24	2.40	1.98
生食用・卸売価格	6.23	3.57	7.14	6.97	9.94	6.68	5.70

(注) 卸売価格はバンコク市場のもの

格でも、近年は生食用の方がやや高いのが特徴である。

#### 4 加工の現状

缶詰加工会社は、現在25社ある。25社のうち15社は比較的規模の大きい会社である。工場の多くは、ブラチュアアップ・キリカーン県など産地にある。

どの工場もパイナップルだけを扱っているのではなく、他の果実・野菜の加工品も同時に生産している。パイナップルを加工するのは、出荷最盛期の4月～6月に集中し、ほかの期間は少ない。現状の生産量からも見て既存の工場の能力は過剰といわれている。

当国では、果汁は全て缶詰製造の副産物である。缶詰1tにつき約200kg生産される。なお、缶詰は、パイナップル1tから平均320kg生産される。

#### 5 流通ルート

生食用果実については、農家の80%は仲買人

を通じて販売しており、残りは農家が直接販売している。加工用については、35～40%は農家自分で工場に運び、残りは仲買人（集荷人）を通して工場に販売される。

小規模なパイナップル農家を構成員とする農協は数多く設立されているが、価格交渉や受託販売をする力はない。

加工品は、大規模工場（会社）では自ら輸出し、小規模工場では貿易業者または仲買人を通して輸出している。

#### 6 輸出の動向

生鮮果実の輸出量は、全体的に見れば極めて少量であるが、最近増加の傾向が見られる。他方、同じく量の少ない冷凍ものの輸出は、過去10年来減少してきている。

缶詰の輸出量は、世界に需給や価格に影響されており、かなり変動している。近年では、最高は1994年の707千tから不作であった1998年の226千tまで幅があるが、総じて停滞しているといえよう。特に、1番の輸出先であった米

パイナップル輸出量の推移

(単位：千t)

	1991	1993	1995	1997	1999	2000
生 鮮	0.5	0.5	1.0	3.0	1.7	4.8
冷 凍	4.9	3.6	2.7	2.8	1.8	2.7
缶 詰	436	503	384	372	475	428
果 汁	80	85	100	62	90	115

輸 出 価 格 の 推 移

(単位：FOBバーツ/kg)

	1991	1993	1995	1997	1999	2000
缶 詰	16.65	14.30	15.01	15.86	24.05	18.42
果 汁	33.05	17.01	22.75	35.62	38.01	25.13

国で1994年ダンピング問題が発生したため、翌年から輸出量は減少した。

果汁の輸出は、長期的に見れば増加傾向である。輸出の場合、ほとんどが濃縮果汁である。

輸出先を見ると、缶詰は、米国、ドイツ、日本の順である。かつては米国が圧倒的に高いシェアを占めていたが、前述の理由で米国向けのシェアは低下した。果汁は、オランダと米国が輸出先として2強となっている。

輸出の将来展望について、缶詰・果汁ともに

大きい増加は見込んでいなく、現在の世界の缶詰輸出に占めるタイのシェア(約35%)をいかに確保するかを目標にしている。

輸出価格は、前頁表のとおり動きを見せており、大生産国における干ばつのため世界的に減産となった1998年～1999年には価格が高騰した。

缶詰、果汁ともに価格の変動傾向は同様であるが、常に果汁の価格の方が高く、また価格の変動も激しい。

